

## 西域出土の西藏本

石濱純太郎

西藏の學問は近來大いに注目されて來て、今日少くとも佛教研究の方面では西藏學は常識の一となつた様だ。従つて種々の調査研究がかなり行届く様になつて來て、余等の如く只文籍上からのみ西藏學を窺ふものにも所謂汗牛も管ならざる資料を提供されると云ふ有様になつた。もはや實に一の *Bibliotheca Tibetica* を要求してもよい時代になつて來た。

西藏の智識の最初は探檢家宣教師等の旅行談見聞記などで、アジヤの山奥深く存在するあの不思議なる神祕國なんど、思はれてゐたのだつたが、茲にかの不撓不屈の學者 Cosma de Korosi の出現によつて始めてこれぞ佛教文明の今尙ほ燦然たる法王國だと云ふ事が極めて明瞭に世に示さるゝに至つた。これが爲めに當時尙ほ進歩遅々たりし歐洲の佛教學界はチヨオマの報告に驚嘆して、これより西藏佛教學の盛んなる一潮流を湧起せしめた。而して彼等佛教學者によつて熱心に搜訪せられたものは佛教經典主として甘殊爾丹殊爾を中心としたもので、之等に對して異常なる努力が拂はれた。次には一步を進めて支那・蒙古・Tatars など周圍地方の材料に及び、遂に西藏本土の一般西

藏學の資料の研究へ迄ぐんぐん進む事となつた。然るに茲に殆んど總ての東洋學に對し根底からの動搖を與へたと云ふべき中央亞細亞の探檢即ち西域訪古行の事業が起つた。固より西藏學もその影響の範圍を脱したのではない。中亞探檢とよく稱せらるゝものゝ實は露領中亞の方を含まないの支那の新疆省から甘肅陝西兩省及び蒙古地方へも渉るがよく西域と概稱する地方の數回の考古學的探檢旅行の事を云ふのである。

中亞探檢に就いては茲には略して述ぶる事をしない。既に之に關する種々の發表もあり、殊に石田杜村君の如きは之を簡易なる一表(一)に約して示し甚だ一覽するに便利である。然し乍ら其中に就いて今の問題に對して重要なものを擧げると、先づ英國 Stein の三回に互る大探檢旅行、佛國 Pelliot の探檢、獨逸の決行した四次の Preussische Turfan-Expeditionen、露國の Kozlov 及び Oldenburg の再三の旅行、及び我國の西本願寺隊の西行などがある。此等はその立派なる驚嘆すべき學術成績の爲めに殊に徧く知られてゐる。然しその此等諸隊の訪古旅行は何れも西藏の本國へは深く踏込んで調査研究をしたものではないから、云はゞ西藏學研究の爲めの旅行とは云へないのは當然である。然し乍ら西藏と支那との交渉は甚だ古いものであり、而して殊に新疆省だの甘肅省などはその兩勢力の衝突地點であり兩文明の交流會所であつたから、別に西藏學専門の訪古團隊の事業で無くても其の所獲の資料の重要さに於ては西藏本土から得るものより劣るとは決して云へない。却て本土よ

りはかゝる地點の方が場所柄の爲めに興味ある收穫を出す云ふものである。實際本國にては得難き珍貴のものをこゝで出したのだ。序で乍ら各國西藏學者の専門の訪古旅行もあるのだが、それは今茲に述べるのではない。今の主題とせる所はかの西域訪古探檢から得たる西藏學のみを扱はうとする。

偕て上述の如き諸探檢隊の西藏學の收穫如何と云ふと、固り各探檢隊とも各々多少の收穫を持つてゐる。分量の點から云へばかの敦煌千佛洞の石室を襲つて尨然たる貴書珍籍を携へ去つた英佛二隊の所獲は恐らく瞠目に價するものがあつたと推想される。それはスタインの報告書類の圖版を一見しても想像するに餘り有らう。斷然他國を抜いたるレコードを保持してゐなければならぬ。然しそのどれ程の收穫なりしやは今の所残念乍ら見當がつかない。何れ何處の探檢隊にしても蒐集品は内容が未知であつても凡て番號づけて目錄は作るのであらうが、發表されるものは大約様子の分つたものからであるから、中々他處目からの推測を許さない。殊にこの西藏文は研究が遅れてゐた様であつたから殆んど想像が出来なかつた。然し先づ矢張り英國が比倫を絶してゐる様で、次は同じく敦煌本を含有せる佛國であり、その後は獨逸となるであらう。露國や我國にもある事はあるが少い。然し我國や支那には敦煌本及びその類の書の人間に散出したものが流傳してゐるが未だ精確なる事は知らない。現に我國では東京や京都にその類の出でゐるを聞いたり寫眞を見たりする。固

り澤山ではないらしい。因に英國の蒐集は西藏本は India Office に特置されてゐるが、佛國のは Bibliothèque Nationale に獨逸のは Museum für Völkerkunde に例の通りある(51)。

これ等西域出土の西藏本はその諸國語本と同じく大體は主として唐を中心としたものであつて元代に及ぶものもある。由來總じて西藏本と云へば大約元以後の本を以て材料とするが、この西域出土本はその以前のものである。大部分の寫本なるは固り當然であるが版本も無いではない。<sup>(三)</sup>無論眞言とか陀羅尼様の小さいものだ。かくの如く古い材料であるから、この西域出土本の知識なくして徒らに西藏學を云々するは危險なる迷謬に墮する恐れがある。

かく貴重すべき材料を多數に得てゐたに關らず研究は意外に抄らなかつた。余は兩三度敦煌出土又は西域出土の文書類を概説する機會を得たのであつたが、常に當時西藏本に關しては省略せざるを得ざりしを遺憾とした。英國の Dr. Barnett, Prof. F. W. Thomas, Miss Ridding <sup>(四)</sup> 白耳義の Prof. Louis de la Vallée Poussin, 佛國の Mrs. Pallot, Bacot, Hackin, 獨逸の A. H. Francke など有數の學者連が之に手を着けてゐたのだから、今少し早く大要の發表あつて余等の學術的好奇心を満足させてほしいものだと思つたものだ。然しこの遅延も無理ではない。凡そ西藏語には綴字法に brda・nin 及び brda・gsar の二種がある。前者は古體舊譯の方で、後者は今體新譯の法である。然るに従來研究されてゐた西藏語學は新譯正字のものであつたが、新出土の諸本は凡て古體で、云はゞ現在の智識

以外の舊譯字計りだから解讀は容易なものでない。況んや且つ其内容たるや種々雜多なるものであるから遂に簡單に進捗しなかつたらしい。漸く三四年以前から論文の形に於て諸雜誌に研究が現れ來つた。余は大に喜び此等の研究を注意しつゝあつたが、中々に余にとつては讀むに難し過ぎた。その少しく難し過ぎるものを分る所のみを濫讀してゐたのだが、今度急に之を纏めて講演する事になり記憶をたどつて諸論文を集め約述して見たつもりである。少しなりとも概説の目的に沿ひ得れば幸である。

そこで此等の材料を文字の上から見ると各様の種類の例を見得る。所謂 *dbu·can* もあれば *dbu·med* も有り、正楷の分り易いのもあれば行草の讀み難いものもある。それは各探檢隊報告書に附せる圖版を一覽すれば直ちに一斑は看取し得る。然し各種字體の見本は澤山有つても大體は後世のもの現在使用のものど殆んど差異はなく同じものと見てよい。少し異なつた形のものもあるが別に立てる程の事はない。想起するのは同じく西域から出土した于闐字がよく西藏字と對應するものだから西藏字の輸入は天竺からではなく于闐から來たもので從來の傳説の解釋を改める説が出て人を驚かしたが、早速 Berthold Laufer 先生によつてさう云ふ奇妙な珍説が出るのはトルキスタン炎と云ふ病氣にかゝつてゐるからだらうと揶揄された事だ。<sup>(五)</sup> ラウフェル先生は手ひどく叱つたが、*Vidyābhūṣana* 先生も亦穩しく反對して元の傳説が生き返つた。目立つて見えるので議論の種となつ

たものには母音 <sup>(七)</sup> i の書き方に左右相反したる二種のある事であるが、確たる差異の原因は分らない様だ。

綴字の上から見ると又種々なる異例が現れてゐる。その内の少しを紹介して見る。先づ i e の前に在る m は my となつてゐる。例へば mi = myi = 人, mi = myi = 木, me = nye = 火, med = myed = 善, bud = med = bud = myed = 女 の如し。大抵はこんな風に y が挿入されてゐるが矢張り現在の様に無い場合もある。例へば me = tog = men = tog の様なものもある。然して唇音の口蓋化は梵語を寫した場合にも現れてゐるから面白。例へば pa = ra = nyi = ti = paramitā, pyin = da = pin<sup>1</sup> = a = byid = na = abhiñā, ba = byi = ſa = bhaviṣya, de = byin = ti = devendra, nye = ga = meḡha, de = bye = devi 等。尚ほ其他の場合にも口蓋化の傾向を見せるから單なる古譯の體としてなく西藏音韻學の一項を成すに足るのだ。次に今の綴字では省かれてゐる da = drag = can が添接されてゐる。例へば dard, dard, bdald, skuld 等。これは文典でも古體として知られてゐるが、それにしては da = drag の添接されない現今通りのものが多いのが議論の種になつた事もある。無氣音の字と有氣音の字が互用されてゐる。例へば pha = pa, nam = ka = nam = mkha, bchan = bcan 等。清音の前添辭が語根の發聲を清音に變じてゐる例がある。stig = pa = sdig = pa, stug = shal = sdug = 等。今は無い前添辭があつたり又省かれてゐるのがある。例へば dmyig = mig ; sod = gsod, bda = brda 等。dgra, bta, dga, bka な

ごには後に<sup>レ</sup>を添接してある。綴字は左から右へ書くのが普通なのに單綴字で上下に重ねて綴つたのがある。綴字の切れ目は一點で無く二點で示したのもある。かゝる種々の異例のある事から之の説明を附けんが爲めに、已に舊譯字時代に尙ほ古體と見らるゝ例があるのだから西藏文字の起源はもう一世紀も古くに傳はつたと解すべく、普通に所謂スロンツァンガンボ時代の事とは致し難いと云ふ説が出た。然しもはや Lanfer, Vidyābhūṣana の論破した如く矢張り大約從來所傳の通りであつたので、古本の當時は正字が定まつてゐなかつたと見るべく、上引の異例等で寫本時代を簡單に考定し去るのは危い。

次には言語であるが、勿論殆んど皆今云ふ西藏語に屬するものだ。然し西藏文字で書いてあるから必ず西藏語と云へず、同様の例は他の文字に於ても殊に西域古學では發見された。西域出土西藏本では又種々の例を出す。先づ Prof. F. W. Thomas は大英亞細亞學會雜誌一九二六年度に二種の西藏文字にして不明語なる文獻を發表し、<sup>(九)</sup> Dr. A. H. Francke は一九二七年の普魯西アカデミー報告に一種を提出した。<sup>(一〇)</sup> トマス博士はその一を Nam 語でないかと推測してゐるが、まだ殆んど解讀が出来ないのであるから實は單なる想像と云つて宜しい。殊に發表された例の文も短く、寫真も出てゐない豫報に過ぎないから何とも手を下し難い。次に梵語のものがある。眞言か陀羅尼だ。次に漢文の西藏音譯のものがある。<sup>(一一)</sup> 金剛經と阿彌陀經とが相次いで紹介された。阿彌陀經には跋尾が有

つて尙ほ他の寫經を作れるを記してゐる。その中の漢文音譯らしいものゝ名を掲げると、

'A. myi. hda. kyi = 阿彌陀經

Par. yan. kyi = 八陽經

Kvan. 'im. kyi = 觀音經

Ta. sim. kyi = 多心經

De. hbur. de . çihū = 大佛? ?

Hda. la. hji. çihū = 陀羅尼集

などゝ見える。八陽經觀音經般若心經などは廣く流傳した事に於ては著名のものだから或は存してゐるだらう。尙ほ「大乘中宗見解」と題する一卷は幸ひにも漢文本も新に出土しゐたるが爲めに難なく比定され、我が宮本正尊氏はトマス、クロオン兩先生を輔けて之を出版した。(一五)尙ほ此外に千字文に西藏文字で振假名せるもの、又藏漢對譯の節用集名義集様のものも此に數へて差支なからう。前者はマスペロ先生羽田博士によつて研究され、後者はベリオ先生に利用された。(一六)(一七)我が財津愛象先輩はかゝる材料を利用して支那音韻史の研究に熱心に従事せられてゐる。次には未だ出版されてゐないが西藏文字でトルコ語を寫せるものが獨逸に在ると云ふ。(一九)大約八世紀のもので、皆突厥字風に二點を重ねて綴字を匂すと云ふ。九枚程存するらしい。たしか佛國の蒐集中にも西藏字譯のト

ルコ文佛教論疏があつた様に記憶する。又西藏語トルコ語對譯のものもあると云ふ。何れも珍貴ならざるはない。終に فرانケは獨逸に存する其書の題簽に漢字の側に西藏假名の有るもの迄指摘して(一一一)ゐるが、然らば羅氏出刊文選の末尾に西藏字で mun·svan 即ち文選とあるをも擧げて置かうか。(一一二)

次に地理歴史關係の出土本に就いて云はんか。佛の J. Hackin 先生は Formulaire sanscrit-tibétain du X<sup>e</sup> siècle. Paris, 1924. (Mission Pelliot en Asie Centrale. Série Petit in Octavo, Tome II) を發表したが、この本の含む所は前半は名義大集の如く、後半は西藏史要と見るべく、之を諸種の rgyal·rabs と比較研究すべく異同がある。又トマス教授は Tibetan Documents concerning Chinese (一一三)

Turkestan と題して豊富なる文書中から I. Ha za, II. Sa-cu Region, III. Nob, IV. Khotan に關する章句を拾集して、地理歴史上の考證をなせる極めて努力多き撰述を試みた。しかも此中に利用せられたる文書中には二五四行に涉り七十六年間に及ぶ西藏の記録有りて、恰も文昌公主の崩御より金成公主の出嫁及び逝世に至る間の記事を載すと云ふ。西藏史研究の貴重なる資料と稱すべきか。

この英國本に前接する部分の佛國に存して、併せてバコオ先生の手によつて研究され校刊する筈と云へば益々以て我々を驚かすに足る。又トマスは文書類を搜つて某入竺支那僧に關するものを集録考證したが、この僧にして誰氏なるかを推定し得るに至らば興趣は數倍するに相違ない。トマス博士は此間にも實は于闐土語の Monosyllabic の語族なるを考證せんと期するものから、Kharosthi

documents からも精該なる憑據を採り、その勞作は人をして驚嘆措く能はざらしむるものがあるのだ。(二五)

佛典は蓋し多數に上るであらうが、今見聞に及ぶ數種の名を記して一斑とせう。(二六)

Satasāhasrikā Prajñāpāraṇitā

Daśabhūmika

Saddharmapuṇḍarīka

Suvarṇaprabhāsī

Mahāparinirvāna

Sūlīstambā

Aparimitāyurṇāmamahāyāna

Buddhānusmṛti

Pradīpaprañidhāna

Jinaputrasiddhi

Hjains · blun · paḥi · mdo

Kaṃsadeśiyārthadyākaraṇa

西域出土の西藏本

其他讚頌陀羅尼類は多いらしい。

尙ほ佛典として唐代の甘殊爾があつたと云ふが、<sup>(二七)</sup>詳しい事が分らぬ。經典史上に有益なる資料となるものに相違ない。

其外雜書は多いが研究が進まぬらしい。<sup>(二八)</sup>鳥の鳴聲による占だの夢占<sup>(二九)</sup>なんその古ト書は民俗學と關

聯して極めて趣味あるが、それ丈に單なる語學の力計りでは物になり難い。<sup>(三〇)</sup>Ramayana の斷片が研

究し出された様だが、難しい Ramayana の原始を論ずるに好材料だと學者の噂は高い。尙ほ木簡

に書いた簡牘類は多數にあつて、嘗て Sir Denison Ross が手にして研究せるを見たが、<sup>(三一)</sup>その結果は未だ聞かない。

偕て佛典の研究にても固り然る所だが、西域の地理歴史の研究をかゝる豊富なる典籍文書類から調査するに就いては、獨り西藏本のみならず西域出土全部の諸本を参照する必要があるのは今更言はでもの事である。然もこれ等諸本の中では出土本以前のあの富饒なる文献を含める支那の漢文本が内容から考へても分量から斷じて必ずその中心であらねばならぬ事も明瞭である。さればこそ泰西碩學の中でもペリオ、ラウフェル兩先生の如く漢學に對し深奥なる學力を有せる人々の成績は拔群なのだ。この漢學力は我が學者の利點であるから我が西藏學者はこの難しい西域西藏學へも一臂の助力を爲すべき義務が無からうか。假令我國には原本資料に闕けてゐても、かの泰西學者の提

出する材料に精審なる注意を拂つて之を補助すべきであらう。トマス、フランケの如き人々は誠に尊敬すべき偉大なる學者ではあるが共に漢文の智識の不足なるは遺憾と云ふべきだ。殊に後者は職掌柄佛典にも縁遠かつた人である。固り困難なる複雑なる問題の多い西域西藏學ではあるが、之にも心を向ける學者の我國に續出せん事を祈つて止まない次第である。

右は十月十六日の大谷學會に於ける講演の原稿に少しの訂正を施せるものである。繕寫して學報に掲げるには意に満たざるものがある。然し今はかくて止むべきにもあらねば所據を略ぼ注して大方の教を請ふ事にした。

註

- (一) 思想昭和四年七月號一一〇—一頁。
- (二) Dr. A. H. Francke: Tibetische Handschriftenfunde aus Turfan. Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften. Sitzung der philosophisch-historische Klasse vom 31. Januar. 1924. III. p. 5 を参照。ノムには然し敦煌本を含んでゐなく。
- (三) Francke: Tibetische Handschriftenfunde aus Turfan. Tafel II. v. p. 20 を見よ。
- (四) 余は講演當日の朝に新刊通報を落手してこの先生の已に故なまを知つたのは奇縁を云ふべし。Young Pao. Vol. XXVII. No. 2—3. p. 243—4 を見よ。
- (五) B. Lauffer: Origin of Tibetan Writing. Journal of the American Oriental Society. Vol. 38, part 1. 又は東洋學報第八卷に出でたる大谷勝眞氏の同論文の解説を見よ。

- (六) Saishchandra Vidyābhūṣṇa : Introduction of the Alphabet into Tibet. Sir Asutosh Mookerjee Silver Jubilee Volumes, Vol. III. Orientalia-Part 2. Calcutta, 1925. p. 111—6.
- (七) B. Laufer : Bird divination among the Tibetans. *T'oung Pao*, Vol. XV. p. 53, Note 1. 及び J. Hackin : Formulaire sanscrit-tibétain du Xe siècle. Paris, 1924. p. 85—6. 及び 76。
- (八) 此項に關しては Laufer : Bird divination ; Hackin : Formulaire ; Francke : Tibetische Handschriftenfunde ; Francke : Weitere Tibetische Handschriftenfunde von Turfan. Sitzungsberichte P. A. W. phil.-hist. Klasse, 1924. XXVII ; Barnett and Francke : Tibetan manuscripts and sgraffiti. *Ancient Khotan*, Vol. I. p. 548—69. 等なる諸例を抽出して排比したるなり。
- (九) Thomas : Two languages from Central Asia. *Journal of the Royal Asiatic Society*, London, 1926. p. 505—6. 尙ほ JRAS, 1926. p. 312—3 及び Thomas : A new Central Asian language. 々圖して總纂したるものなるをハルビヤ誤りのたのび。同誌の p. 509 及び 4。
- (10) Francke : Ein Dokument aus Turfan in tibetischer Schrift, aber unbekannte Sprache. SPAK, phil.-hist. Klasse, 1927. XII.
- (11) Thomas : The Nam language. JRAS, 1928. p. 630—4.
- (12) Francke : Tibetische Handschriftenfunde aus Turfan. p. 20.
- (13) Thomas and Clauson : A Chinese Buddhist text in Tibetan writing. JRAS, 1926. p. 508—26.
- (14) Thomas and Clauson : A second Chinese Buddhist text in Tibetan characters. JRAS, 1927. p. 281—306. Thomas : Note supplementary to the article "A second Chinese Buddhist text in Tibetan characters. JRAS, 1927. p. 858-60.
- (15) Thomas, Miyamoto and Clauson : A Chinese Mahāvāra Catechism in Tibetan and Chinese Characters. JRAS, 1929. p. 37—76. 尙ほ宮本氏の本書に關する論文が宗教研究に發表されたが余は未だ讀まなう。
- (16) H. Maspero : Le dialecte de Tch'ang-ngan sous les T'ang. *Bulletin de l'École Française d'Extrême Orient*, XX, II.
- (17) 羽田亨博士「漢蕃對音千字文の斷簡」*東洋學報*第十三卷第三號。

- (16) Paul Pelliot : Note sur les Tou-ju-houen et les Sou-pi. *T'oung Pao*, Vol. XX. p. 323—31.
- (17) Francke : Tibetische Handschriftenfunde aus Turfan. p. 5—6.
- (18) 同上 p. 6.
- (19) 同上 p. 6.
- (20) 「魯沙石室古籀殘片」所收唐永隆寫本文殘卷二の末尾に在る。
- (21) JRAS, 1927. p. 51—85; p. 807—44; 1928. p. 63—98; p. 555—95; 1930. p. 47—94; p. 251—300. 附註 The Ha-Za of Chinese Turkestan. JRAS, 1926, p. 311—2. 卷の標題に引く。
- (22) Thomas : A Chinese Buddhist Pilgrim's Letters of Introduction. JRAS, 1927. p. 546—58.
- (23) Thomas : The Language of Ancient Khotan. *Asia Major*, Vol. II, p. 251—71.
- (24) Thomas : Names of Places and Persons in Ancient Khotan. Beiträge zur Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte Indiens, Festgabe Hermann Jacobi zum 75. Geburtstag. Bonn, 1926. p. 46—73.
- (25) 此項の綴合は Ancient Khotan, Serindia, Innermost Asia, Francke : Tibetische Handschriftenfunde 卷の 66—68 頁の 56—57 頁の 56—57 頁の綴合に引く。
- (26) Pelliot : Une bibliothèque médiévale retrouvée au Kan-sou. BEFEO, VIII, Nos. 3—4.
- (27) J. Bacot : La table des présages signifiés par l'éclair. *Journal Asiatique*, Mars-Avril, 1913. Lauffer : Bird divination.
- (28) Francke : Tibetische Handschriftenfunde. Francke : Drei weitere Blätter des tibetischen Losbuches von Turfan. SPAW, philosph.—hist. Klasse, 1928. VIII.
- (29) Thomas : A Tibetan version of the Rīmāyāna. *Indian Studies in Honor of Charles Rockwell Lanman*. Cambridge, 1929. 余は未だ之を見なかつた。 JRAS, 1930. p. 428—31, JAOS, Vol. 50, No. 2, p. 171—4. に出したる綴合に引く。
- (30) 之を知つた。
- (31) 之を今に引く例を導く。 Francke : Khotan'samen von Khotan (A. MA. CA) auf tibetischen Dokumenten der Turkinsammlungen von London und Berlin. SPAW, phil.—hist. Klasse, 1928. XXXI; Notes on Sir Aurel Stein's Collection of Tibetan Documents from Chinese Turkestan. Serindia, Vol. III. Apperdix G.